

ヨーゼフ・ロート小論

坂 卷 隆 裕

序

ヨーゼフ・ロート（1894年～1939年）は「天性の語り手」と称えられることの多い小説家である。実際、ロートの作品は、20世紀の前衛小説にありがちな、綿密な心理描写や厳密な哲学的思考に傾くことなく、登場人物の運命が伝統的手法によって語られるのが常である。また、その物語はしばしば叙事詩やメルヘンによく出てくるような状況を扱っており、その限りにおいては近代以前の文学との親近性を窺わせる。しかしより詳しく検討すれば、それらの文学との差異もまた明らかであり、その差異のなかに作品の現代性が込められているようだ。本稿ではそのようなロートの二つの作品、『果てしなき逃走』（1927年）と『聖なる酔っぱらいの伝説』（1939年）を取り上げ、主題と手法の共通性を探ってみたい。

I

長編小説『果てしなき逃走』（1927年）は、ワイマール共和国時代に数多く書かれた「帰還兵小説」のひとつである。¹主人公のオーストリア軍中尉フランツ・トゥンダは第一次世界大戦中の1916年8月、ロシア軍の捕虜となる。しかし、シベリアに住むとあるポーランド人に運よく助けられ、彼の農場に偽名をつかって身を隠し、そこで終戦を迎える。そして1919年の春に、婚約者イレーネの待つウィーンに向けて、はるばる帰郷の途に就くのである。

彼は、長く危険な放浪という英雄的行為を愛した。（中略）戦争の年月におこなったあらゆる英雄的行為も、いままさに挑もうとしてい

るこの企てにくらべれば、子供だましのように思われた。絶望の傍らで、希望が生まれる。この危険な帰還を果たすことによるのみ、再び愛されるにたる男になることができるのだ、と。²

長く続いた戦争のあと、さらに長い放浪を重ね、許嫁のもとへ帰還する——ホメロスの『オデュッセイア』を思わせる状況である。周知のように、ギリシア神話の知将オデュセウスは、10年続いたトロイア戦争のあと、さらに10年を費やして妻ペネロペの待つイタケーに帰り着き、再会を果たす。『オデュッセイア』を下敷きにした現代小説といえど何と云ってもJ・ジョイスの『ユリシーズ』が知られている。『ユリシーズ』は一つ一つの挿話が『オデュッセイア』に対応するよう、緻密に構成されている。そのような対応関係が『果てしなき逃走』にあるわけではないが、「花嫁のもとへの帰還」という主人公の行動の動機と、その成否を最後まで未解決のままにして読者の興味を繋ぎつつ、諸国遍歴が語られるという作劇法は『オデュッセイア』を自然に連想させる。果たしてトゥンダは「長く危険な放浪」の末に許嫁のもとに帰ることができるのか？小説は始めのうちそんな読者の期待に応えるような波乱万丈の展開を見せる。ウィーンを目指して出発したトゥンダはキエフ近郊でロシア赤軍に捕えられるが、女性革命家ナターシャと恋仲になることによって難を逃れ、革命のために戦う闘士となる。その様子は感情を抑えた、即物的な文体で語られ、ときおり悪漢小説や風刺小説のような黒いユーモアが混じる。

ある人間が革命家になる——それが読書や省察や体験の結果であろうと、愛のためであろうと、大した違いはない。ある日、彼らはサマラ地区のとある村に進軍した。赤軍兵士を拷問して殺した罪に問われた司祭と五人の農民がトゥンダの前に引き出された。彼は司祭と五人の農民を縛り付け射殺するよう命じた。死体は見せしめに放置した。
(中略)

「わたしのためにやったのね」、とナターシャはさげすむように言った。しかしトゥンダは初めてナターシャ以外のために、何かをなしたのだった。彼女に非難されたとき、ナターシャのことはすっかり忘れていたことに彼は気づいた。しかしそれは黙っていた。「もちろん君のためさ！」と彼は嘘をついた。

彼女は喜び、そして彼を軽蔑した。³

だがやがて革命は赤軍の勝利をもって終結し、官僚による徹底した管理体制がはじまる。革命の高揚は跡形もなく消え去る。トゥンダはナターシャと別れて、無口なコーカサスの女性アーリヤを伴侶とする。そしてバクーへと赴き、啓蒙映画の製作に携わる仕事を始める。

しばらく続いたこの静かで単調な生活は、フランスからソ連を視察に訪れた、年配の弁護士、その妻、若い男性秘書の3人組によって終わりを告げる。トゥンダはこの美しいパリ女性・マダム G にバクーの街を案内し、ホテルで情事を持つ。この出来事をきっかけに、彼はバクーには為すべきことはなにも残されていないと唐突に悟る。美しい弁護士夫人に象徴されるヨーロッパ、そしてまたウィーンに残してきた許嫁イレーネへの思慕が蘇る。そしてトゥンダはアーリヤのもとを去り、旅券を手に入れてウィーンへと旅立つ。

ロシアに腰を落ち着けるかに見えたトゥンダが、再び旅に出るにいたった心境は錯綜しており、3人称による客観的な記述、トゥンダの日記と手紙、小説の1人称の語り手（トゥンダの友人であるヨーゼフ・ロートという名の小説家）の証言など、さまざまな視点から示される。しかし、それぞれの記述は乱反射する鏡のようで、あまり明確な像を結ばないようである。確かなことは、トゥンダの中で大きな転換が起こり、彼が再びヨーロッパを目指し、イレーネの後を追いつめることである。

もちろん花嫁イレーネは彼を誘っていた。6年前に歩き始めたその道のりを、彼はしばし中断していたのだ。彼は再び歩き始める。彼女は

どこで暮らしているのだろうか？どんな風に？まだ自分を愛しているだろうか？⁴

ここへ至って小説は花嫁のもとへの帰還という当初のモチーフをようやく取り戻したかのように見える。

ところが、ヨーロッパに辿り着いてから、小説の雰囲気は一変する。トゥンダと外界の間には冷やかな距離のようなものが生じる。例えば、指揮者の兄を頼って訪れたライン河畔の町での滞在は、思わず声を上げて笑ってしまうくらいコミカルに描かれているのに、トゥンダの心は始終冷めたままである。彼は、指揮者の家に集まる教養市民階級の人々と会話を交わし、町を歩く。それらの会話も、トゥンダの目を通して描かれる町の様子も、奇妙なことには、物語の展開やトゥンダの内面に影響を及ぼさない。脈絡もはっきりとしないままに言葉が交わされ、情景が描写されていく。そしてそのような情景の切れ端には、ユルゲン・ハイツマンが指摘するように、しばしば「死」のイメージがまとわりついている。⁵ 小説中の記述からすると、トゥンダがドイツにやって来たのは1925年ごろと推定される。歴史的にみればこのころドイツは第一次世界大戦の敗戦で被った巨額の賠償金問題を克服し、いわゆる「黄金の20年代」が始まる時期にあたる。しかし、戦場を体験したトゥンダの視線はそのような外界と自分の内面との間に（死以外には）まったく関係性を築くことができないのである。そんな中、イレーネへの思いも、しだいに変化を遂げていく。

僕が暖かく、メランコリックな気持ちになるのはただひとつ。イレーネのことを考えるときだ。それは、僕がまだ愚かな中尉で花婿だったころに知っていた僕の許嫁のイレーネですらない。僕が愛し、どこに住んでいるのかも知らない、ある見知らぬ女性だ。（中略）僕がイレーネのことを考えるとき、それは僕の中に残された最後の敬虔な気持ちだ。⁶

「僕は自分を責めるんだ、あまりにも無抵抗に偶然に身を委ねてきた、と。今はまるで、自分を回復するために、イレーネを探さなければならぬかのような気分だ。でも本当は何をしたらいいのか分からない。」⁷

このように生身の女性から理想化された存在に変容しつつあるイレーネの足跡を追って、トゥンダは旅行を続け、ベルリンを経由してから、パリに到着する。

イレーネはこの町に生きている。マダム G はこの町に生きている。パリに足を踏み入れた瞬間から、二人の女性はもう区別できなかった。彼女たちは一人の女となり、そして彼はその人を愛した。⁸

トゥンダのパリ到着後、小説はやや生気を取り戻す。しかし、彼がパリで改めて思い知らされたことは、「自由思想の発祥の地であるこの都市でさえも（中略）干からびたパンの皮すら無料では手に入らない」⁹という資本主義社会の現実である。滞在費の尽きたトゥンダは、カルディヤク家の娘パウリーナにドイツ語を教えるという仕事を苦心して見つけるが、その家庭教師先の玄関である女性と出会う。

その女性はどんどん近づいてきた、そして歩道の縁から家の入口までは三步と離れていないにもかかわらず、彼女の歩む道のりは半永久的に続くかのようであった。彼女は家の中に入るのではなく、彼の方に、まっしぐらに彼をめがけてやって来る、そして彼はもう何年も前からこの場所でこの女性を待っているかのような気がした。¹⁰

この女性こそ、パウリーナとドレスデンへ旅行するためにカルディヤク家を訪ずれた、イレーネなのである。彼女は「健康に、幸福に暮ら

して」おり、「ゴルフをし、海岸の砂浜で海水浴をし、金持ちの夫を持ち、社交パーティーを催して客を迎え、慈善団体に所属し、善良な心を持っている。」¹¹しかしトゥンダもイレーネもお互いを認識することはない。二人は言葉も交わさずにすれ違ってしまふ。この土壇場のすれ違いによって、トゥンダが追い求めているものが現実のイレーネではなく、幻の女性にすぎないことがはっきりと示される。全編を貫くトゥンダの唯一の行動の動機がイレーネとの再会であったことから、読者は不意に階段を外されてしまったようなショックをうける。そして小説の末尾、マドレーヌ広場で待ち合わせをするトゥンダとともに、パリの雑踏のなかに呆然と取り残されるのである。

1926年8月27日、午後4時であった。店は込み合い、デパートでは女性が押し合いへし合いし、ブティックではマネキン人形が回転し、喫茶店ではのらくら者がおしゃべりをし、工場では歯車が唸り、セーヌの岸辺では乞食達が虱取りをし、ブローニュの森ではカップルが口づけを交わし、庭では子供たちが回転木馬に乗っていた。この時であった。わが友トゥンダ、32歳、健康で澁刺とした、若くて力強い男、あらゆる才能を備えた男はマドレーヌ広場に立っていた。世界の首都の真ただ中である。そして彼は何をしたらよいのか、分らなかった。彼には職もなく、愛もなく、意欲もなく希望もなく、名誉心もなく、エゴイズムすらなかった。

彼ほど余計な人間は、この世に誰もいなかった。¹²

上に引用した箇所には「1926年8月27日」という日付があるが、トゥンダがロシア軍の捕虜になったのは1916年8月。オデュッセウスと同じくちょうど10年間放浪の旅を続けたことになる。しかし『オデュッセイア』の結末との何という落差であろう。オデュッセウスは首尾よく故郷の島に帰り着き、求婚者たちをなぎ倒して、妻ペネロペを取り戻す。そのことによって彼は失われていた世界の秩序の回復に成功する。これ

に対して、トゥンダはやはり長い放浪の後、西欧に戻ってくるが、目の前にあるのは、すでに秩序を回復しつつある新しい世界である。彼は逆にその秩序からこぼれ落ちていき、帰属する場所も目標も見いだせぬまま、「世界で最も余計な人間」として幻のイレーネを求めて「果てしなき逃走」を続けていかなければならない。周到な演出により、最後の最後で読者の期待を裏切る手法によって、主人公の陥っていた深刻な方向喪失が一気に明かされる。ハプスブルク帝国の消滅で祖国を失い、放浪の生活を送ったユダヤ人作家ロートのもっとも重要な文学的テーマがここには端的に表現されている。

だが一方で、シベリアに帰ることを断念してパリに残る決断をしたトゥンダが次のように描かれるとき、その「逃走」は「闘争」の様相も帯びる。

しかし彼には針葉樹林^{タイガ}への郷愁はなかった。彼には、ここが自分の場所であり、ここで没落するのだと思われた。彼は腐敗の臭いを嗅いで生き、カビを糧とし、崩壊する家の埃を呼吸し、木喰虫の歌にうっとり耳を澄ます。¹³

金銭の支配する腐敗した世界のなかに、孤立無援の状態で踏みとどまること。しかしその決意には、暗い敗北の予感が漂っている。インザ・ヴィルケはそのロート論のなかで進歩・発展を旨とする近代ヨーロッパ社会に対して、トゥンダをアンチ・ヨーロッパと規定し、「果てしない逃走」とは、人々が「社会の敵」トゥンダから逃げていくのだ、と主張している。¹⁴ 奇抜な言い方ではあるが、社会と鋭く対峙するトゥンダのあり方をうまく表現しているといえるだろう。

II

パリを舞台にしたロートの小説をもう一つ取り上げてみたい。ナチス政権の成立後パリに亡命したロートが、貧困と重度のアルコール中毒に

苦しみながら、死の直前に書き上げた『聖なる酔っぱらいの伝説』（1939）である。『果てしなき逃走』の末尾で、トゥンダは1926年8月27日のマドレーヌ広場に立ち尽くしていたが、そのとき遠景には「セーヌの岸辺で虱取りをする」浮浪者たちの姿が描かれていた。ロートは最後の作品で、社会の底辺に生きる彼らに焦点をあてた。

1934年の春の暮れ、一人の中年の紳士が石段を下りて行った。石段はセーヌ川に掛かる橋のたもとから岸辺へと通じている。そこでは一知らない者はまずいないが、それでもこの機会に思い出していただくとしよう一パリの浮浪者たちが眠るのが常であった。あるいは、野営する、といった方が良いかもしれない。¹⁵

こうした浮浪者の一人が、小説の主人公アンドレーアスである。ポーランドから炭鉱労働者としてやって来た移民で、愛人の夫を殺し、2年間投獄されていた過去がある。身を持ち崩して酒浸りとなり、滞在許可の期限も切れている。帰るところも行くあてもないという意味では、マドレーヌ広場に立ちつくしていたトゥンダの矢折れ刀尽きた姿のようにも見える。そんなアンドレーアスに対して、石段を下りてきた身なりの良い紳士は奇妙な申し出をする。お金にお困りのご様子だから援助して差し上げたい、返済は御無用、しかし、と話は続く。私は聖バティニョル教会に像が祀られているリズューの聖テレーズ様の物語に感化されてキリスト教徒になった、もしお金を返す気があるなら、バティニョル教会でミサを執り行う司祭に返してほしい。あなたに借りがあるとすれば、それは小さな聖テレーズ様に対してなのだ。そうやって紳士はアンドレーアスに200フランの金を渡す。アンドレーアスは、こう見えても自分は名誉を重んじる男だ、借りた金は必ず返しませう、と請け合う。そして聖バティニョル教会の住所をメモする。

この金でアンドレーアスは散髪に行き、まともなレストランで食事をする。すると偶然その場にいた実業家に、明日家の引っ越しをする予定

だが手伝いに来ないかと声をかけられ、そこで二日間仕事をし、久しぶりで金を稼ぐ。こうして偶然に導かれ、彼はまるでメルヘンの主人公のように、つかの間、お金や、寝る場所や、仕事や、愛や友情の記憶を取り戻していく。そもそも見知らぬ人の希望をかなえることによって褒美をもらう、というのがメルヘンや奇跡譚の定型の一つであることを考えれば、『聖なる酔っぱらいの伝説』はその型を踏襲していると言えるだろう。また文体の面でも、聖書との類似が指摘されている¹⁶。

この小説をロートは、もらった金はすべて教会に寄付すると約束する乞食の小話を聞いて着想した、と伝えられている。ロートはその場で「それをもとに物語を書こう。私の最後の物語になるだろう。」と語ったそうである¹⁷。

片々たる小話をもとに話を膨らませていくロートの豊かな想像力には驚くばかりだが、冒頭、紳士を登場させ、アンドレアスに小テレーズへの借金の返済を依頼するという設定によって、小説はよりメルヘンに接近することになった。メルヘンでは本人の意思よりも、神々の意志や、運命・偶然などが登場人物の行動を規定する。実際、もしこの小説が、次々に訪れる偶然によってアンドレアスが失ったものを取り戻し、小さなテレーズに借金を返し、すべてはテレーズ様のおかげであったという結末にいたれば、型通りのメルヘン、奇跡譚になったことであろう。しかしロートは小テレーズに借金を返すというモチーフの行方を未解決のままに引き延ばす。アンドレアスが教会に金を返しに行こうとすると必ず邪魔が入って、金を使ってしまう。金がなくなると、不思議な偶然によってまた金が手に入り、アンドレアスはバティニョル教会に赴く、ということが洗練された手法によって何度も繰り返される。読者はその間、メルヘンと現実の間で宙吊りにされるような感覚を味わう。

モチーフの解決は意外な形でもたらされる。何度目かに教会を訪れた際に入ったあるレストランでアンドレアスは真青な服を着たテレーズと名乗る少女に出会う。すると彼女を聖テレーズと思い込み、強引に金を返そうとして発作を起こして倒れ、そのまま息を引き取るのである。

両義的な結末である。客観的に見れば、彼はついに金を返せなかったことになる。その意味では奇跡譚の否定とも言えよう。アヒム・キュッパの論文によれば、『聖なる酔っぱらいの伝説』が文字通り聖人伝の現代版であるのか、それとも聖人伝をイロニーッシュに否定した作品なのかについて、論者の意見は分かれているという。キュッパ自身は後者の立場をとり、その根拠の一つとして小テレーズ像が、何度も言及されながら、小説の中に一度も姿を現さないことを挙げている。¹⁸

しかし、小テレーズ像の不在に関しては、別の角度からも考えることができるかもしれない。『果てしなき逃走』におけるトゥンダとイレーネの関係を思い出してみよう。姿を見せないイレーネを追いかけるうちに、イレーネはトゥンダの中で生身の女性から内面化・理想化された存在に変貌していった。同様のことが小テレーズ像とアンドレーアスの間にもあてはまるのではないか？そもそもアンドレーアスが小テレーズに金を返しに行くのは、「名誉を重んじる男」として紳士との約束を守るためであった。しかし、何度も借金を返しそびれるうちに、彼の中でやはりテレーズの存在が内面化されていく。そしていつの間にか金を返すのは紳士のためというよりも、自分のための行為になっていく。所持金を失って、もとの川岸の生活に戻ろうと決心すると、いないはずの自分の娘の姿をとってテレーズが夢に現れ、アンドレーアスにささやく。「ごめんなさい、お父さん、でもお願いだからあさっての日曜日、私のところに来て。バティニョルの聖マリ教会よ。」¹⁹

引き延ばされた結末が、人違いのイロニーで終わるところも『聖なる酔っぱらいの伝説』と『果てしなき逃走』は共通している。トゥンダは探し求めた本人とすれ違いながら気づかずに、イレーネの幻影をさらに追い求める。それに対してアンドレーアスは別人を探し求めた存在と思ひ込むのである。

「ああ、」とアンドレーアスは叫んだ。「こいつは素晴らしい！こんなに大きくてこんなに小さな聖女様が、こんなに大きくてこんなに小さ

い貸主さまがわざわざ私を訪れてくださるとは思いもしなかった。こんなにも長いことご無沙汰していたというのに。」²⁰

青い服を着た少女との出会いで発せられる、アンドレーアスのこの言葉はさまざまなことを物語っていると思われる。聖なる存在（「聖女さま」）は借金の返済を迫る債権者（「貸主さま」）としても意識されている。どうやらアンドレーアスにとって借金（Schuld）を返すことは、罪（Schuld）を償うことに繋がっているようだ。少女の服の色、「祝福された日」の「空以外にはないような²¹」青は、天国とも無垢の象徴とも解されるであろう。では、アンドレーアスは小テレーズによって罪を許され、祝福されているのだろうか？しかし、救済が与えられたのかどうかははっきりしない。そもそも青い服を着た少女は聖テレーズではないし、借金は結局返されていない。

このようにロートは類型的な奇跡譚にひねりを加えることで、非常に両義的な結末を創りだした。引用の中で繰り返される「こんなにも大きくてこんなにも小さい」という矛盾した形容は象徴的である。その世界では、メビウスの輪のように、聖と俗、罪と救済、真と偽、宗教と現実が通じ合い、いつのまにか入れ替わってしまうように見える。そして「長いことご無沙汰していた」聖テレーズが向こうからやってくる、というアンドレーアスの幻想は、忘れていた自分自身の過去と再会する、という小説の内容に呼応していると言える。ということは聖テレーズに至る道のりとは、結局のところ失われてしまった自分自身のアイデンティティーに辿り着くはずの道のりなのではないだろうか。

それにしてもトゥンダもアンドレーアスも、現実のなかでは決して探し求めるものに出会うことはないのである。最後に『果てしなき逃走』第32章のロマン主義に関する記述を引用しておきたい。

イレエネのことを考えると、彼女が自分と同じくらい、この屈託のない優雅な世界から遠く離れているような気がした。そのような関係

は「ロマン派的 (romantisch)」と呼ぶことができるだろう。わたしには、これこそ今日なお正当性を持つ唯一の概念であるように思える。この現実、この虚構のカテゴリー、魂の抜けた概念、空洞の枠組に耐える苦しみと、信念のはっきりした非現実のなかに生きる楽しみの間に選択の余地はない、とわたしは思う。ゴルフをし、チャールストンを踊るイレネと、警察に登録すらされていないイレネのどちらを選択するか迫られて、トゥンダは後者を選んだ。²²

受け入れがたい現実に対抗するためのロマン主義の原理。これも、ロートが生涯取り組んだ課題の一つである。そう考えるとき、『聖なる酔っぱらいの伝説』の中で意味ありげに描写される少女の服の青色は、到達できない憧れを示すロマン派的象徴ととらえるのがふさわしいようにも思えてくる。ロートの小説の登場人物たちは、以上見てきたように理想の愛や、本当の自分の姿を探し求めるが、作品には現実の葛藤の中でその不可能性が示されることが多い。そしてそうした、ある意味では現代的な認識が、ときにメルヘン風、ときに叙事詩風の、どこかひなびた物語の装いに包まれているところにこの作者の文学の大きな特徴があると言えよう。

注

- 1 『『果てしなき逃走』はワイマール共和国において独自のジャンルをなしていたといってもよい一連の戦争帰還者の物語の一つである。』 Vgl. Heizmann, Jürgen: *Mythen und Masken*. In: Joseph Roth—Zur Modernität des melancholischen Blicks. Hrsg. von Wiebke Amthor und Hans Richard Brittnacher. Walter de Gruyter, Berlin/Boston 2012. S. 207-208.
- 2 Roth, Joseph: *Die Flucht ohne Ende*. Ein Bericht. Kiepenheuer & Witsch, Köln, 1994. S. 13.
- 3 *ibid.* S. 25.
- 4 *ibid.* S. 60.
- 5 Vgl. Heizmann, Jürgen: *Mythen und Masken*. In: Joseph Roth—Zur Modernität des melancholischen Blicks. Hrsg. von Wiebke Amthor und Hans Richard Brittnacher. Walter de Gruyter, Berlin/Boston 2012. S. 214.

- 6 Roth, Joseph: Die Flucht ohne Ende. Ein Bericht. Kiepenheuer & Witsch, Köln, 1994. S. 97-98.
- 7 ibid. S. 100.
- 8 ibid. S. 107.
- 9 ibid. S. 122.
- 10 ibid. S. 139-140.
- 11 ibid. S. 140.
- 12 ibid. S. 142-143.
- 13 ibid. S.142.
- 14 Vgl. Wilke, Insa: So überflüssig in der Welt. In: Joseph Roth—Zur Modernität des melancholischen Blicks. Hrsg. von Wiebke Amthor und Hans Richard Brittmacher. Walter de Gruyter, Berlin/Boston, 2012. S. 285.
- 15 Roth, Joseph: Die Legende vom heiligen Trinker. Deutscher Taschenbuchverlag, München. 2004. S. 5.
- 16 Vgl. Küpper, Achim: «Mein Wort ist noch lange kein Bekenntnis»: Zur Gesinnungslosigkeit bei Joseph Roth: Eine Interpretation der “Legende vom heiligen Trinker”. In: Colloquia Germanica, Vol. 39, No. 3/4, G. Narr, Tübingen, 2006. S. 347.
- 17 ibid. S. 349.
- 18 「この物語には真の奇跡は存在しない。また本物の聖者もない。この伝説 (Legende) は本当の伝説ですらなく、せいぜいのところその『アイロニカルな作りかえ』、さらに言えば伝説に対する皮肉な回答にすぎない。」 ibid. S. 340-342
- 19 Roth, Joseph: Die Legende vom heiligen Trinker. Deutscher Taschenbuchverlag, München. 2004. S. 38.
- 20 ibid. S. 71.
- 21 ibid. S.71
- 22 Roth, Joseph: Die Flucht ohne Ende. Ein Bericht. Kiepenheuer & Witsch, Köln, 1994. S. 137-138.

